審査の結果の要旨

氏　名　　趙　晟恩

論文題目　　子育ての視点からみた都市環境構築に関する研究
－地域に展開される親子の環境への評価および認識に着目して－

本論文は、子どもの数が減少している社会情勢の中、育児・子育ての視点から建築・都市環境の役割を探求することをテーマとしている。親子の外出時の行動に着目し、日常生活の中で都市空間の要素をどのように認識し、評価しているかを明らかにすることから、歩行空間や公園などの都市を構成する屋外スペースが果たす役割を見出し、より子どもを育てやすい環境づくりへの知見を得ることを試みるものである。

本論文は全７章で構成される。
第１章では、本論文の背景として、子どもをとりまく社会の現状および研究の目的、既往研究と本研究の位置づけ、論文の構成を明らかにしている。

第２章では、2006 年に多摩ニュータウンで行った調査をもとに、親が利用している保育支援サービスにより、環境への認識と評価の差異がどのように現れるのかを検証している。その結果、長時間子どもを預けている保育所を利用する親は都市空間を「移動」の視点で認識することが多く利用時間が短く、利用していない親子は様々な要素で「遊び」を作り出している場面が見られるなど、より環境要素に対する積極的な利用が見られた。

第３章では、第２章での知見（利用している保育支援サービスの時間が短いほど環境要素の活用に積極性が見られる）を活かし、幼稚園や子育て支援センターを中心に調査対象者を募集し、多摩ニュータウン（以下多摩 NT 地区）のみならず、同じく多摩市の聖蹟桜ヶ丘地区（以下聖蹟桜ヶ丘地区）、世田谷区三軒茶屋地区（以下三軒茶屋地区）を比較群として設定し行った調査の概要を整理している。調査は、親子が外出する際に、カメラを貸し出し、気になるところを写真で撮影する「写真投影法（キャプション評価法）」を用いている。
全調査対象者が撮影した場所を分析した結果、「歩行空間」の割合が最も高い結果となり、他の場所より都市環境を評価するにあたり環境の質を左右する空間であることがわかった。

第４章では、地域ごとの、「歩行空間」での親子の都市環境に対する認識や行動の差異を整理している。
三軒茶屋地区では「遊び」に関する場面を撮影したことが多く、また、多様な経路を選択しながら都市環境要素を利用している様子を把握している。一方、多摩 NT 地区では経路選択において、往路と復路が重複することが多く、単調な経路を利用している調査対象者に関しては、歩行空間での「遊び」場面より、「移動」場面を撮影した割合が高い傾向が見られた。また、聖蹟桜ヶ丘地区は、一定した傾向は見られないが、三軒茶屋地区と多摩 NT 地区の両地区の特徴を持っている結果となった。三つの地域でそれぞれの特徴が見られた要因として地理的要件が大きく影響していると考えられ、地域により環境要素の認識および評価に差異が生じていることを明らかにしている。

第５章では、それぞれの地域ごとに調査対象者の利用する「公園」の位置をプロットした結果から、公園の選定要因について明らかにしている。
三軒茶屋地区の調査対象者は、利用する公園が重複することが少なく、重複する公園におい

ても公園の様々な要因について写真を撮影している。また、公園内での行為に関しては、その遊び方や遊具の使い方などにおいて具体的かつ個性的であることが把握された。また、人があまりいない公園を好む傾向が見られた。一方、多摩 NT 地区および聖蹟桜ヶ丘地区の調査対象者は、数多くある公園の中で調査対象者の利用する公園が重複することが多く、公園内での撮影された写真においても、同一の場面を撮影している事例が多く見られた。遊具に関しても、遊具の量、種類などが評価基準となっている。また、人が多く集まる公園を好む傾向があり、公園の利用に関しては三軒茶屋地区と多摩 NT 地区・聖蹟桜ヶ丘地区が対照的であることが把握された。このような差異が生じる要因として、地域ごとの公園の整備状況および人口密度が影響していると考えられ、様々な都市環境の要件により親子の「公園」に対する評価とニーズを把握することができた。

第６章では以上の結果から今後の都市空間の整備において、新しい環境をつくるのではなく、今あるものをどのように活用しつつ改善していくかに関する試論を述べている。

第７章では、以上をまとめ、親子の環境構築について提言を述べている。

以上のように本論文は、子育て中の親子に着目し、今後の都市空間の整備に寄与する可能性を示した。

今までの子どもに関する研究は「就学児」を対象としているものが多く、本研究のように「未就学児」とその「親」を対象としたものは、未就学児を対象とする調査が非常に困難であるため、未開拓の領域であった。このような理由から、今後の都市空間の計画および整備において方向性を示唆する研究として、建築計画学の発展に大いなる寄与となりうるものである。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。